

氏名(本籍)	かねもとあきら 金本 彰(東京都)
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	博乙第1784号
学位授与年月日	平成13年12月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	Clinicopathological study of multiple superficial oesophageal carcinoma (食道多発表在癌の臨床病理学的検討)
主査	筑波大学教授 医学博士 深尾 立
副査	筑波大学助教授 医学博士 轟 健
副査	筑波大学助教授 医学博士 中原 朗
副査	筑波大学助教授 医学博士 長田 道夫

### 論文の内容の要旨

目的：食道多発表在扁平上皮癌の臨床病理学的特徴を明らかにすること。

対象と方法：解析対象とした食道表在癌は、1962年から1997年までに国立がんセンターにて術前未治療にて外科的切除(276例)もしくは内視鏡的粘膜切除術(EMR)(83例)が行われた扁平上皮癌(組織型)である。多発表在癌は、複数の病巣が互いに1cm以上離れて存在し、そのおのおのが表在癌で食道内腔に十分露出したものとし、診断の間隔が1年以内のものを同時性、1年以上のものを異時制多発癌とした。これらの多発表在癌と単在表在癌を臨床病理学的に比較した。統計学的検定は $\chi^2$ -test, Fisher's exact probability testにより行い、生存率算出はKaplan-Meier法を用い、log rank testとCox Mantel testにより検定した。

結果：食道表在癌359例中99例が多発癌であった。99例中83例が外科的切除術例で16例がEMRであった。異時性多発癌は外科的切除例中3例、EMR中4例に認めた。多発表在癌と単在表在癌を比較すると、多発表在癌は①男性優位、②飲酒習慣高度、③喫煙習慣高度、④咽頭癌の合併高頻度などが統計学的に有意であった。家族歴、主病巣の大きさ、占居部位、深達度、組織学的分化度、静脈侵襲、リンパ管侵襲、リンパ節転移には明かな差がなかった。多発表在癌の病巣数は2病巣75%、3病巣16%、最大は8病巣であった。分布としては主病巣の口側もしくは肛門側3cm以内に66%が存在し、微細な病巣が主病巣近傍に多く存在した。多発表在癌と単在表在癌の5年生存率は72%と73%で差がなかった。

考察：近年食道表在癌に対してもEMRという低侵襲な治療法が普及した。全食道が残る本治療法においては、多発癌の有無が治療成績に大きな影響を与えると考えられる。術前未治療の進行食道癌を中心とした多発癌頻度は16.7-18.8%と報告されていて、今回の研究結果の28%よりも低率であった。表在癌の66%が3cm以内に存在し2病巣以下のものが75%を占めることから、多中心性に発生した食道多発癌が発育進展する段階で一部癒合して進展すると考えると、進行癌と進むにつれて多発癌の頻度が低くなる理由が説明できる。したがって食道表在癌の診断治療および経過追求にあたっては、本研究で得られた危険因子と病理学的特徴に十分配慮し、副病巣の発見につとめることが重要である。

結論：食道表在癌は同時性あるいは異時性に多発する可能性が高いことに留意し、多発癌の危険因子とその臨床病理学的特徴を踏まえて、副病巣の発見と経過追求に慎重かつ十分な配慮を行い必要がある。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究で得られた結論は特に斬新なものではない、しかし、359例という多数の解析症例を適正な解析手法を用いて分析した論文である。しかも日本有数の国立がんセンターにおける症例解析結果であるということから、本論文の結論は従来報告が及ばぬ重みを持つ。早期診断技術の進歩に伴い低侵襲なEMRがますます普及している現在、本研究で指摘された食道表在癌の臨床病理学的特徴は、食道表在癌EMR治療法における重要な注意事項であり、本論文の臨床的価値はきわめて高いものである。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。